ヘロドトスとスキティア

――その地理的知識に就いて――

織田武雄

一

ギリシア・ローマ時代の古代地理學における地理的知識の發展には、およそ三つの段階が區別されるであろう。その一つは地中海・黑海沿岸のギリシア植民地の發達に負うものであり、その地理學はヘカタイオスやヘロドトスを以って代表される。第二はアレクサンドロス大王のインド遠征による地理的知識の擴大であり、アレクサンドリアのエラトステネスの地理學として發展した。また第三の段階は、ローマ帝國の版圖の擴大によって齎された地理的知識を基礎にして、ストラボンやプトレマイオスの地理學が生れたのである。

しかしギリシアにおいて最初に地理學を祖述したと傳えらるヘカタイオスの著作が、わずかに斷片しか遺されていない今日では、ギリシア人の初期の地理的知識を知るには、ヘロドトスによらねばならない。ヘロドトスの著作はもとより歴史書ではあるが、彼が諸國の歴史を記すに當って、地理や民族などに就いても多くの地誌的記述を行っている點において、地理書としても極めてすぐれた價値を有している。[1] 殊にギリシア人によってスキュティア（Skythia）と呼ばれた今日の南

ロシア地方に就てのヘロドトスの記述は、古代においては唯一の詳細な、また最もすぐれたものであり、ロストウツェフも南ロシアの考古學的調査を述べるにあたって、スキティア王族の埋葬儀式に關するヘロドトスの記述は、「殆どそのまま適用することが出來る」[2]と賞讃を以って記しているほどである。從ってこの小論においても、ヘロドトスがスキティアの自然や諸民族の分布について記載している地理的知識を、地理學の立場から考察してみたいと思うのである。

二

黑海北岸のスキティア地方には、すでに紀元前七世紀ごろから、ミレトスを中心として多くのギリシアの植民市が建設され、ギリシア人の進出がみられた。フンボルトが「ギリシア人ほど多數の、しかもその多くが強大な植民市を建設した民族は古代世界にみられない」[3]と述べているように、ギリシアの植民時代と呼ばれる紀元前七五〇年ごろから五五〇年ごろにかけては、地中海・黑海の沿岸はギリシア人の植民活動の舞台となったのである。これにはギリシアの國土の地理的環境が山勝ちであるため、人口の自然增加や大土地所有制の發達によって耕地が著しく不足をつげるに至ったこと、或は當時の貴族政治への不滿や支配階級內部の抗爭などによって、政治的な自由を求めて移住を希望する者が續出したことなど、種々の原因が擧げられるであろう。[4]またこのような植民地發展の結果、ギリシアの諸都市には商工業や貿易が發達し、多くの富が蓄積され、さらにそれに伴ってギリシア人の企業的精神は益々盛んになったばかりでなく、個人の自由と物質的な富裕が市民たちに與えられることになった。斯して彼らの間から、先ずミレトスにおいて、最初のギリシアの諸科學が自然哲學として誕生したのである。[5]

ギリシアの諸都市の中でも、ミレトスが通商と文化において早くから最も榮えたのは、小アジアがペルシアによって支配されるまでは、ギリシア世界の中心的位置をなしていることが考えられるであろう。ミレトスは小アジア西南部のラト

モス灣口に位する良港を控え、ミレトスを中心にして試みに圓を畫くならば、クノッソス・アテナイ・ヘレスポントスなどが何れも同一圓周上に配列するように、エーゲ海の海上交通の焦點に當っていた。[6] のみならず、ラトモス灣に注ぐマイアンドロス河谷に沿っては、陸上の隊商交通路が小アジアから、さらにメソポタミア方面へ通じ、またエジプトとの海上交通も盛んであり、エジプトにおけるギリシアの商埠地ナウクラティスの建設に當っても、ミレトスの市民は指導的な役割を演じた。從ってミレトスはギリシアの最も强大な都市として商工業が繁榮し、ギリシアの植民地をはじめ、エジプト・フェニキアなど各地からの商品が交易された。そしてまたミレトス自體からも有名な「ミレトスの毛織物」*Milesia vellera* 或はオリーヴ油・陶器などが廣く輸出されたのであった。[7]

しかしミレトスをしてさらに繁榮に導いたのは、黑海方面をヒンターランドとする植民地の發展であり、黑海沿岸には約七五のミレトスの植民市が建設された。ミレトスの黑海への進出は、先ず黑海南岸における紀元前六五〇年ごろのシノペ（Sinope）の建設にはじまり、シノペを中心にして、黑海の南岸から東岸にかけては、トラペズス（Trapezus）・ファシス（Phasis）・ディオスクリアス（Dioskurias）などの多くの植民市が開拓され、また黑海西岸にも、イストロス（Istros）・オデッソス（Odessos）の諸市が發達した。しかしミレトスにとってさらに重要な植民地は、背後に廣大なスキティアの南ロシアの大平原を控えた黑海北岸である。卽ちこの大平原を貫流するドニエストル河・ブグ河・ドニエプル河・ドン河の諸河川はスキティアの奥地への交通路をなし、その河口にはテュラス（Tyras）・オルビア（Olbia）などの諸市が設けられた。就中、オルビアは紀元前六四五年ごろにはすでに存在した黑海北岸の最も古い植民市の一つであり、その名の示す如く、「富裕な（オルビオス）」都市として繁榮したのである。[8] またクリミア半島の南岸ではテオドシア（Theodosia）、黑海とアゾフ海との間のケルチ海峽に面してはパンティカパイオン（Pantikapaion）などが建設された。その他、ミレトス以外にも、メガラの植民市としてケルソネソス（Chersonesos）、テオスの植民市としてはファナゴリア（Phanagoria）などの諸市も黑海

沿岸に存在した。

このように黒海沿岸にギリシャの植民地の發展をみたのは、黒海沿岸の山地には森林がよく繁茂し、地中海地方に不足していた船舶材料としての木材の產出が多く、金・銀・銅などの鑛產物にも惠れていたからであり、ケルチ海峽から黒海東南岸を洄游する鮪などの漁獲物も、黒海からギリシアの市場に送られる重要な商品であった。またスキティア地方をはじめ、黒海の周邊には多數の遊牧民が居住していた爲、畜產物は極めて豐富であり、特に小アジアのカパドキア高原に產するアンゴラ羊毛は品質の優良を以って知られ、ミレトスの最も重要な輸出品である毛織物の原料に用いられた。しかし黒海地方の代表的な輸出品は穀物であり、南ロシアの黒土地帶にまたがるスキティア地方は、當時から既に穀物產地として著われ、ギリシアの穀倉をなしていたのである。さらにスキティア地方からタナイス河に沿って北東の方向には、ウラル山地から西シベリアやアルタイ山地の產金地帶に及ぶと推定される交易路が通じ、此等の地方に產出する金はスキティア地方に送られ、黒海北岸のギリシアの植民地を通じて輸出された。いま一つ黒海貿易において重要なのは、古代奴隷制の發展に伴う「生きた商品」としての奴隷であり、ローマが主にアフリカから奴隷を輸入したのに對して、ギリシアの市場に送られた奴隷の大部分は黒海地方から供給された。またこれらの黒海方面からの商品に對して、スキティア地方をはじめ、黒海周邊の諸民族はギリシアの植民市を通じてギリシア文化の影響を受けていた。卽ち今日スキティアの古墳から發見される夥しい出土品によっても明かなように、ギリシアの都市において生產される織物・金屬製品・陶器、或はオリーブ油・葡萄酒なども輸入され、ギリシア商品の重要な輸出市場をなしていたのである。[9]

三

ヘロドトス（前四八四―四二五年頃）が生れたのはミレトスの南に位置し、ドリアの六市（クサポリス）の一つであるハリカルナッソスで

あるが、彼はイオニア的教養に培われ、ヘカタイオスなどの散文誌家（ロゴグラフォイ）の影響を受けたばかりでなく、その著作に當っては、廣く諸國を歴訪し、みずからの見聞によるところの資料を集成して、その「歴史」を構成しようと試みた。從って彼の足跡は、エジプトからメソポタミア、或は小アジアから南イタリアなどの各地に及び、黒海北岸ではオルビアを訪れ、スキティア地方に關する見聞を高め、多くの傳承を蒐集することを得たのである。[10]

ヘロドトスのスキティアに關する記述は、ペルシアのダレイオス王のスキティア遠征を主題とする第四卷に大部分含まれているのであるが、彼の著作全般にみられる特色として、その内容は整然たる體系を缺き、むしろ主題を離れた極めて多方面に亘る事項が挿話的に述べられている。[11]從ってここでは前述したように、その中からスキティア地方の風土及びその周邊の諸民族に關する記述に限定して、先ず、ヘロドトスのスキティア地方の風土的記載が如何なるものであつたかをみることにした。

そのうち最初に述べられるべきことは、スキティア地方の形態に就いてである。ギリシア人はヨーロッパの東部から、アジアのはるか東方にまで及ぶ地域をスキティアと總稱している。[12]しかしヘロドトスはこの廣義のスキティアに對し、本來のスキティア人が居住する地域を區別して、これをスキティアと呼んでいるのであるが、[13]この地域はヘロドトスによれば、南は黒海、東は彼が黒海に劣らぬほどの大きさを有すると誤ったマイオティス（Maiotis, Maeotis）湖、[14]即ちアゾフ海に面し、しかもこの黒海とアゾフ海に面する部分の距離はそれぞれ等しく、さらに西と北の内陸の境界に當る部分の距離も等しいと考えた。それ故に彼はスキティアの形態を以って正方形を呈すると看做しているのである。またその距離は、黒海に面する南岸において、イステル（Ister）河、即ちドナウ河口を起點としてアゾフ海まで二〇日行程と推定し、（一日行程は二〇〇スタディア＝約三〇キロとみて）これを四、〇〇〇スタディアと見積っているから（101）*、ヘロドトスの云うスキティアは、今日のウクライナ南部を中心として、ベッサラヴィア・モルドヴィア地方の一部を含めた地域にほぼ當ってい

る。

＊算用數字はヘロドトスの節の番號、ローマ數字は第四卷以外の卷數を示す。

ヘロドトスが何故スキティアの形態をこのように正方形とみなしたかは明かでないが、彼がナイル河と對稱的に配列すると考えたイステル河（I・33）を以って、この正方形の一つの起點としていることからみても（99）、ヘロドトス以前にすでにヘカタイオスなどによって作製されたイオニアの世界地圖から、スキティアの形態に對して、このような幾何學的な形態が彼の先入觀となったのであろう。[15] 尤もタウロイ人（Tauroi）の居住する山勝ちのクリミア半島のみは、ヘロドトスもスキティアから南東に突出していることを認めている。しかしそれを半島ではなく、アッティカ（Attika）や南イタリアのイアピュギア（Iapygia）の所謂突出地（Akte）と比較していることからみても[16]（99）、僅にペレコップの狹い地峽によって大陸と連續しているクリミア半島の實際の形態に就ては、正しい知識を有していなかったことを示している。

南ロシアにおいてギリシア人に特に印象を與えたのは、大河とその流域の廣漠たる平原であり、ヘロドトスも「巨大で數多い河川を除けば目をひくものはない」（82）と述べ、黑海に注ぐ河川として、テュラス（Tyras）・ヒュパニス（Hypanis）・ボリュステネス（Borysthenes）・パンティカペス（Pantikapes）・ヒュパキュリス（Hypakyris）・ゲロス（Gerros）の六河川を擧げている（51—56）。このうちテュラス河はドニエステル河、ヒュパニス河はブグ河、ボリュステネス河はドニエプル河であるが、ヘロドトスはボリュステネス河に就いては、イステル河に次ぐ大河であり、且つナイル河に次いで豐饒な河川で、沿岸には肥沃な草原が擴り、最も良質の穀物を產し、さらに河口では莫大な海鹽が採取され、或はアンタカイオイ（antakaioi）と呼ばれる背骨のない巨魚が棲息し、鹽漬に供されると述べている（53）。この記述に從えば、河口に位置するオルビアの後背地をなすこの地方では、すでにギリシアの穀倉として、多量の穀物を產出したことが知られる。またアンタカイオイとは、ロシア人が、caviare と稱して、その鰾（はらみ）の鹽漬を賞味するチョウザメのことであり、[17] 海鹽は今日でもド

ニエプル河口に近いクリミア半島の潟湖シバシュ灣において、鹽田によって生産されている。[18]

しかしまだ未開拓な土地も多く殘されていたとみえ、現在ではこの地方には森林は全く存在しないが、ヘロドトスはボリュステネス河の東岸を森林地（ヒュライア）（Hyiaia）（54, 76）と記していることからみて、當時はロシアの森林地帶が河川の流域に沿つて、はるかに南部にまで及んでいたことが知られる。

なおヘロドトスは以上の三河川の外に、ボリュステネス河から以東に、上記の如くパンティカペス・ヒュパキュリス及びボリュステネス河の分流のゲロス河を加えている。しかしドニエプル河から黑海までに至る地域では、これら三河川に該當するような河川は見出し得ない。

次にアゾフ海に流入する河川として、ヘロドトスはタナイス（Tanais）・オアロス（Oaros）・リュコス（Lykos）・シュルギス（Syrgis）の四河川と、タナイス河の支流のヒュルギス（Hyrgis）河を記載している（57, 123）。タナイス河は云うまでもなくドン河であるが、ヒュルギス河をその支流とすれば、ドン河の支流のドネツ河以外にはない。しかしヘロドトスの知識が果してドン河とドネツ河の分流する地點まで正確に及んでいたかは疑問である。またアゾフ海に流入する河川はドン河のみであるから、前記のオアロス・リュコス・シュルギスの三河川が何に當るかは不明と云うよりは、實在しないものであり、シュルギスはヒュルギスをおそらく重複して別の河川と誤つたのであろう。ただドン河とヴォルガ河とは現在のスタリングラード附近で接近しているから、プトレマイオスによつて始めてラ（Ra）河と記載された、カスピ海に注ぐヴォルガ河を以つてオアロス河に比定されないこともないが、確實な根據があるわけではない。[19]

要するに南ロシアにはドニエステル・ブグ・ドニエプル・ドン河以外には大河川は存在しないにも拘らず、ヘロドトスがスキティア地方に以上の如く多くの河川を記載しているのは、おそらく彼がオルビアにおいて、スキティア地方の奥地に交易のために往來した商人たちから傳聞した知識によつたものであろう。即ち大小の支流がよく發達しているこの地方

では、本流と支流とが別個の河川と誤られ易い上に、彼はアゾフ海を黑海と同じほどの大さを有するものと考えたから、タナイス河以外にも、なお他の河川が流入するものとなしたのであろう。またヘロドトスは源流を不明となしているボリュステネス河以外のスキティアの河川は、何れも湖に水源を發していると述べている(51, 54, 57)。しかし土地の低平な南ロシアの平原では、プリペット濕地のような低濕地帶が現在よりもさらに廣く擴つていたのであるから、[20] 內陸地方に對して知識の乏しかつたヘロドトスは、これを湖と誤ったものと思われる。しかしアリストテレスがスキティアの河川が凡て北方に存在すると想像された架空のリパイ(Ripai)山脈に源流を發するとなしていることと比較すれば、[21] ヘロドトスの知識の方がはるかに進んでいたことが認められる。

以上のスキティア地方の河川と共に、ギリシア人の注意をひいたものは氣候である。ケッペンの氣候分類によれば、[22] 地中海式氣候(Cs)に屬するクリミア半島南岸の一部を除けば、南ロシアの黑海沿岸地帶はステップ氣候(BS)、さらに內陸地方では、冷帶氣候のうちでも月平均氣溫が一〇度(攝氏)以上に達するのが四ヶ月に滿たない Dfc 氣候に含まれる。從つて溫暖な地中海式氣候に慣れたギリシア人にとつては、スキティア地方は著しく寒冷なところとして感得されたに相違ない。ヘロドトスはスキティアは酷寒で、一年の八ヶ月間は土地は凍結し、キンメリア(ケルチ)海峽も氷結して、夏の四ヶ月も寒氣は去らないと述べている(28)。またヒポクラテスも寒冷な北風に吹き曝されるスキティアの平原は、日中は濃霧に覆われ、年中冬の如く、夏も僅日あるに過ぎないと記している。[23] いま試みに、アテネとオデッサ・キエフ・サラトフの氣溫を比較してみれば、地中海沿岸では冬も氣溫は一〇度を余り下らないが、南ロシアでは冬の數ヶ月間の平均氣溫は氷點下に低下し、アゾフ海では海面も凍結して、地中海沿岸よりははるかに寒冷となる。しかし大陸性を呈する南ロシアでは、夏には氣溫は地中海沿岸に近いほど上昇する。それにも拘らず、ヘロドトスが夏もなお寒冷な地方と誤つたのは、彼がオルビアを訪れたのは夏ではなく、[24] その滯在の期間も短く、スキティアの氣候に就いて充分な理解を得ることが出來

各月平均氣溫（C）　中央氣象台「外國氣候表」による

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
アテネ	8.8	9.2	11.4	15.1	19.1	23.6	26.5	26.4	23.9	18.4	14.0	10.9	17.3
オデッサ	−2.9	−0.4	2.4	8.7	16.7	21.3	23.1	22.6	16.6	11.4	4.0	0.5	10.4
キエフ	−5.1	−3.7	−0.2	6.9	15.2	19.0	19.4	18.6	13.1	7.5	0.7	−3.1	7.4
サラトフ	−10.9	−8.3	−4.4	7.0	17.0	21.9	23.8	21.6	13.5	7.1	−2.2	−7.5	6.6

なかつたからであろう。これに對して、ストラボンは黑海沿岸の地域では、冬は海面も氷結するほど寒冷であるが、夏はまた著しく暑熱であると述べ、スキティアの氣候が大陸性を呈することに就き、正しい知識を傳えている。[25]

また氣候と關連する農作物に就ては、ヘロドトスはスキティアでは麥類のほかに、タマネギ・ニンジン・扁豆・粟[17]、及び亞麻に似た大麻[18]が栽培され、良質の牧草が生育することを述べている。なおこの點に就いてさらに詳細な觀察を下しているのはテオフラストスであり、森林の樹種としては槲・楡・トネリコを擧げ、氣候の溫暖なクリミア半島では、各種の梨・林檎を產し、盛土すればイチジク・ザクロも栽培されると記している。[26]

四

以上においてスキティアの風土に關するヘロドトスの記載するところを述べたのであるが、その知識は主に彼がオルビアにおいてギリシアの商人たちなどから得たものと思われる。しかし彼等が關心を有していたことは、交易に際しての實際上の必要から、この地方に居住する諸民族や諸部族間の生活樣式・言語・風習などの相違であつたに違いない。その關係からヘロドトスのスキティア地方に關する記事のうちでも、特に民族學的な記載は豐富であるが、傳承・風俗・慣習などの民族學的な問題は別に讓り、ここではヘロドトスの記載に基づいて、諸民族の地理的分布を考察してみよう。

前述の如くヘロドトスは周邊の諸民族と區別して、彼の云う狹義のスキティア地方に居住する

民族を、ギリシア人がスキュタイ(Skythai)と呼ぶ民族であると述べている(8)。スキュタイ、卽ちスキティア人の民族系統については今日なお充分解明されていないが、ヘロドトスがこの民族の由來に關する傳承を記し(8—11)、彼等はマッサゲタイ人に追われて西漸し、キンメリア人の後を追つてスキティアに占居したと述べているように(11)、おそらく東方から南ロシアに侵入したイラン系の民族であると考えられ、キンメリア人を驅逐して、紀元前七世紀ごろにはスキティア王國を建てたのである。[27] このスキティア王國は部族國家であり、彼等は原住民[28]の農耕民や遊牧民から收奪した生産物を以つてギリシア人と交易を營み、ギリシアの商品を輸入して、ギリシア文化の攝取につとめた。從つてヘロドトスのスキティア人に關する記述も、スキティア人と被支配者の原住民の關係を示したものと解される。

そこで先ずヘロドトスの云うスキティアの內で、その西方から居住するものを擧げるならば、オルビアの周邊にはカリピダイ人(Kallipidai)・アラゾネス人(Alazones)が居住するが、ヘロドトスがギリシア系スキティア人(Hellenes Skythai)と記していることから見て(17)、ギリシア人の移住民との混血種族であつたと思われる。またそれに接して、ボリュステネス河の東岸には農民スキティア人(Skythai georgoi)、西岸には農耕スキティア人(Skythai aroteres)が居住し、兩種族とも農業を營んでいるが、前者がオルビア市民(ポリタイ)と自稱しているように(18)、ギリシア文化の影響を多く受けていたものと思われる。これに對し、後者の農耕スキティア人は純然たる農耕民であつたと考えられる。彼等はヘロドトスが自家の食用のためでなく、販賣のために小麥を栽培すると述べているように(17)、オルビアの後背地に當るこの地方はギリシアの穀倉をなし、輸出用商品作物として小麥が栽培されていたことが知られる。

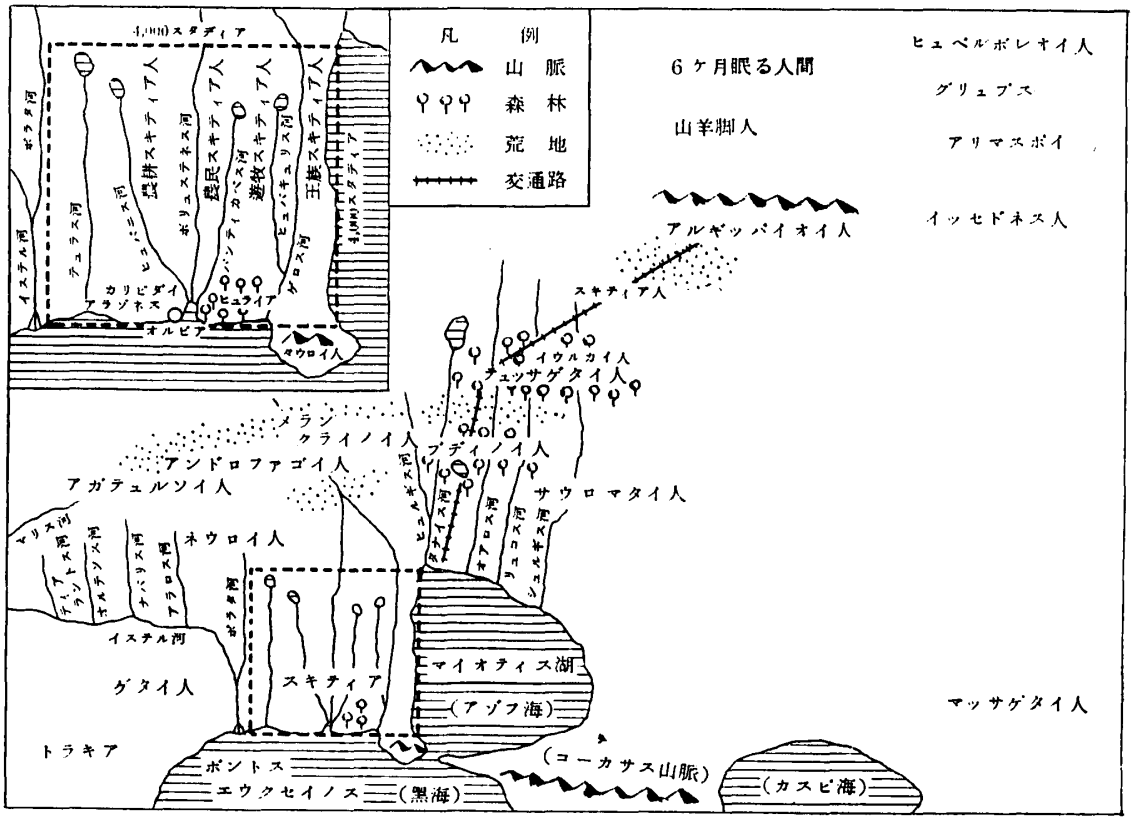
農民スキティア人の東は、遊牧スキティア人の居住地となり、前記のボリュステネス河口の森林地(ヒュライア)を除けば樹木のないステップ地帶であり、その名稱の示す如く遊牧が行われていたのである(19)。またその東方のタナイス河に至るまでの土地は「所謂王族領と呼ばれ、他のスキティア人を自己の奴隷と看做していた」(20) 王族スキティア人の居住地である。從

つてこの王族スキティア人がスキティア地方に侵入して、上記の原住民であつた諸種族を支配した本來のスキティア人なのであるが、ヘロドトスが記しているように、ドン河とドニエプル河の中間の地帯が、彼等の居住する當時のスキティア地方の政治的中心をなしていたのである。[39] また彼等は黒海北岸のギリシアの植民地とは親縁關係を保ち、此等のギリシア植民地を通じてギリシア文化を攝取し、スキタイ文化と呼ばれる中央集權的な文化を發達せしめた。しかしその生活様式からみて、スキティア人が中央アジア一帯の諸民族と同様に遊牧民族であつたことは、ヘロドトスにみられる(46)ばかりでなく、ヒポクラテスの記述からもうかがわれる。即ちヒポクラテスによれば、彼等は馬・羊などを率いて水草を追つて移動するが、女子は二室か三室を有する四輪乃至六輪の車に居住し、また馬羊の肉、馬乳、或はそれから作られた乾酪を常食としていたのである。[40]

五

ヘロドトスはさらにスキティア周邊に居住する諸民族に就いて述べているのであるが、充分な知識を得られなかったとみえ、その記述は一層不正確となり、不可解なものが多い。此等の諸民族のうち、スキティア周邊の最西端に居住するのがアガテュルソイ人(Agathyrsoi)である。ヘロドトスによれば、彼等の風習はトラキア人に近く、金に富み、大部分が黄金製の裝飾品をつけ(104)、またその居住地はマリス(Maris)河の水源地方(48)とされている。マリス河はドナウ河の支流のテーシス河に注ぐマロシュ(Maros)河であるとすれば、[41] 今日のトランシルバニア地方に當り、カルパチア山地はヨーロッパの產金地帶の一つである。それ故にヘロドトスの記載を信頼すれば、アガテュルソイ人はトラキア系の民族であり、古くからこの地方の金鑛—おそらく砂金—の採掘を行っていたと推定される。

それに隣るネウロイ人(Neuroi)は、前記のアロテレス、即ち農耕スキティア人の奥地に居住する民族で、スキティア



人と類似した風習を有し、またヘロドトス自身は信じ難いこととしているが、彼等は年に一度は「擧つて數日間狼に化する」と記している(105)。これは全く架空の風説とも云えるが、或は何らかの宗教的儀禮か、北歐の特にスラヴ系の諸民族の間に傳えられる狼つきの迷信を反映しているものとも解される。何れにしてもネウロイ人はその位置からみて、現在のドニエプル河上流の白ロシア地方に居住していたスラヴ系の民族であると思われる。

ネウロイ人の東にはアンドロファゴイ(Androphagoi)人が居住するが、スキティアとは無人の荒地を以つて隔てられていることからみて(18)、南ロシアでも奥地の、現在のスモレンスク附近に當るものと推定される。ヘロドトスによれば、彼等は遊牧民であり、スキティア人と同じような衣服をまとっているが、言語は彼等固有のものを用い、また最も未開で、その名の示す如く食人の風習があると云う(106)。このヘロドトスの記述に對して、ヨーロッパでは中世までフィンランドには食人が行われたと信じられていたから、アンドロファゴイ人は卽ちフィン系の民族であると推定されているが、しか

しフィン人が食人の風習を有すると云う傳承こそ、ヘロドトスやソリヌスに由來するものと看做せば、[114]この解釋は矛盾せざるを得ない。從つてむしろプトレマイオスの地理書において、ボリュステネス河の上流にみられるアマドコイ(Amadokoi)がアンドロファゴイに當るものとすれば、アンドロファゴイは民族の單なる名稱に過ぎず、それをギリシア語を以つて解したが爲に、食人の風習のことが、附加されたものと考えられる。[115]またアンドロファゴイ人の東に居住するのは、すでにヘカタイオスにもみられる[116]メランクライノイ人(Melanchlainoi)であるが、ヘロドトスは彼等はスキティア人の風習にならい、その名の示す如く黑衣をまとっていると述べている(108)。彼等が果してヘロドトスの云うように黑色の羊毛で織られたような黑衣を着していたか否かは疑問であつて、むしろアンドロファゴイの場合と同樣に、民族の名稱をそれと類似するギリシア語を以つて解釋したからではなかろうか。[117]

メランクライノイ人のさらに東にはブディノイ人(Budinoi)がみられる。ヘロドトスはブディノイ人に就いて、土着の遊牧民で人口の多い大種族であり、またその居住地は、川獺や海狸などの毛皮獸の多い大きな湖を有する森林地帶であり、彼等は青い眼と赤い髮を有していると述べている(108, 109)。南ロシア地方には大きな湖沼は存在しないから、森林地帶中の沼澤地を誤つたものと思われるが、南ロシアの植物帶の分布からみて、ブディノイ人の居住地域は、ステップ地帶から森林ステップ乃至森林地帶に遷移する地域——古代には森林地帶の限界は現在よりもさらに南方の北緯五〇度付近にまで及んでいたとみて[118]——として、現在のサラトフからクイブシェフ(サマラ)にかけての一帶であると考えられる。またタキトゥスがゲルマニア人の容貌を「鋭い空色の眼、黃赤色の頭髮」[119]と表現していることからみて、ブディノイ人をゲルマン系とみなす見解もあるが、アジア人と比較すれば、ヨーロッパ系の民族はしばしば青眼赤髮を以つて表わされているのであるから、それを以つて直ちにブディノイ人をゲルマン系とは斷定し難い。[120]

ブディノイ人と關連して、さらにヘロドトスの記載において注目されるのゲロノイ人(Gelonoi)である。ゲロノイ人は

ブディノイ人の居住地において、ゲロノス（Gelonos）と呼ばれる高い木造の城壁を有する都市に居住し、彼等の家屋も神殿も凡て木造であり、しかも風俗も宗教もギリシア風で、言語もスキティア語とギリシア語を混用しているという。それ故にヘロドトスはゲロノイ人は黒海北岸のギリシア植民地から奥地に移住して來たギリシア人であり、またブディノイ人は遊牧民であるが、ゲロノイ人は農耕民であつて、容貌も皮膚色もブディノイ人とゲロノイ人とは異つていると記している（108, 109）。しかしながら、ギリシア人の植民地は地中海でも黒海でも凡て海岸に設けられ、彼等が沿岸から遠く隔つた内陸に移住して、植民市を建設した事例は、他には全然見られない。[11] 從つて初期のカナダやシベリアの植民において、フランス人やロシア人の商人が、原住民との毛皮交易のために奥地に多くの交易所を設けたように、黒海北岸の植民市から派遣されたギリシアの商人によつて、スキティアの奥地に開かれた交易所であり、それをヘロドトスが恰も都市であるかの如く誇張的な表現をなしたのであると解し得ないこともない。しかし他方、ヘロドトスはゲロノイ人は農耕民であり、土地を耕作し、穀物を食用とすると述べている。しかもスラヴ人の家屋や集落は凡て木造であり、殊にサラトフには、十九世紀まで木造の城壁を有する典型的なスラヴ都市が殘つていたことからみて、[12] スラヴ系の民族が古代からこのような木造の集落を作つていたとすれば、ゲロノイ人はスラヴ系の農耕民であり、定住的生活を營んで文化も進み、比較的大きな集落を形成していたと解される。若しゲロノイ人がスラヴ系であるとすれば、ヘロドトスはブディノイ人はゲロノイ人と人種的に異なるように述べているが、青眼赤髪であることからみて、ブディノイ人も同じくスラヴ系に屬する民族であり、ゲロノイ人の周邊に居住していた遊牧民であると看做し得るであろう。

ブディノイ人から南方の、即ちスキティア地方周邊の最東端のところにはサウロマタイ人（Sauromatai）が占居していた。ヘロドトスによれば、その位置はタナイス河から東に三日行程、アゾフ海から北に三日行程のところにあり、また一五日行程ほどの全く樹木のない土地である[21]となしているから、アゾフ海からカスピ海にかけての、ヴォルガ河下流の

ステップ地帶に當っている。またヘロドトスはサウロマタイ人は女人國アマゾンの女子とスキティア人の男子との結合によって生れた民族であると云う傳承（110—116）を記し、その傳統によつて女子は狩獵にも戰鬪にも參加し、女子の權力が著しく高いことを注意している。このサウロマタイ人がサルマタイ、卽ち、サルマティア人（Sarmatai）と同一であるとすれば、サルマティア人はスキティア人とは類緣の民族であり、紀元前二世紀後半ごろ、蒙古民族の西遷に伴って起った民族大移動によって、タナイス河を越えてスキティアに侵入し、スキティア人を驅逐して、ローマ時代にはハンガリーにまで進出している。しかしロストウツェフは、サルマティア人が家父長制の强固な遊牧民族であったのに對し、サウロマタイ人の間では女權の高かったことからみても全く別個の民族であり、サウロマタイ人はサルマティア人によって征服され、歷史の舞臺から姿を消したのであると看做している。[19]

六

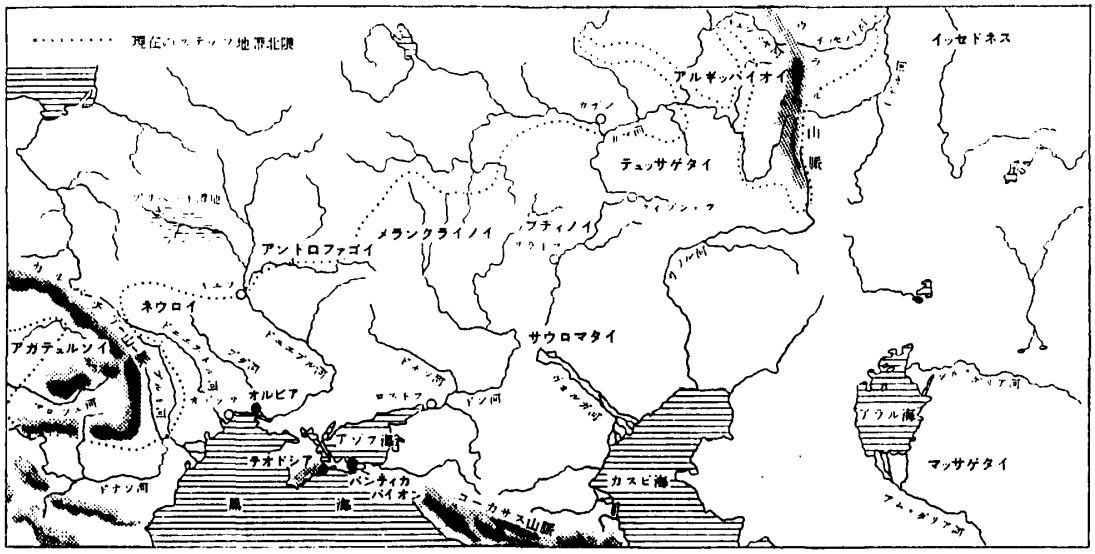
以上のスキティア地方周邊の諸民族が居住する土地から、さらにその奥地に就ては、ヘロドトスは沼澤や無人の廣漠たる土地が擴っていると述べている（17, 18, 20）。事實南ロシアを除いた當時のロシアは、廣大な森林に覆われ、人口の極めて乏しい土地であったに違いないが、また一面から云えば、スキティア地方周邊の地域までが、ギリシア人の地理的知識の及んだ限界であり、ギリシア人に知られた世界、卽ちォイクメネの北限を示しているのである。

しかし注目さるべきことは、スキティアから北東の方向にかけての地域のみは、ヘロドトスの知識が遙かに遠隔の地方にまで及んでいたことである。卽ちヘロドトスの記載するところに從えば、ブディノイ人の居住地から北方へ七日行程の無人の荒地を進んで、やや東に轉ずると、人口の多いテュッサゲタイ人（Thyssagetai）と、それに續いてイウルカイ人（Iurkai）が居住している。彼等は何れも狩獵民族であり、周邊の地域は森林地帶をなしている（22）。テュッサゲタイ人の

名稱は、ヘロドトスが述べているトラキア地方のゲタイ人（Getai）（IV99, V3）及びカスピ海の東のマッサゲタイ人（Massagetai）（I・201）と類似し、何れもゴート人、即ちゴトーネス人（Gothones）と關連を有するとみなす見解もあるが、[14] タキトゥスにみられるように、ゴトーネス人はヴィストゥラ河下流地方に居住し、[15] 南ロシア方面へ移動したのはさらに後の時代のことである。またイウルカイ人はプリニウスやメラにみられるトゥルカエ人（Turcae）に當るが、[16] 古代にはトルコの名稱はまだあらわれていないから、この名稱は後のトルコ民族とは關係がない。從つてこの兩民族は未開の狩獵民族であること、且つ現在ヴォルガ河流域のサマラ付近にフィン人の後裔のモルドヴィア人が分布していることからして、おそらくフィン系の北歐の民族であろう。またその居住地域は前記のタナイス・オアルスなどアゾフ海に注ぐ四大河川が貫流すると云う點から（123）みても、ヴォルガ河上流のカム河流域と推定され、或は現在のモロトフ（ペルム）附近を流れるチュソヴァヤ（Chusovaya）河の名稱もテュッサゲタイと關係を有するかと思われる。[17]

これより更に奥地に進むと、ヘロドトスは王族スキティア人から分れたスキティア人が居住し、土地は平坦で、肥沃であると述べている（23）。スキティア人の一部がこの地方まで分布していたとは考えられないが、しかしスキティアからの交易路が通じ、スキティア人などの往來があったことが想像される。この地域から東北に向つて再び礁角不毛の土地が續くが、それを過ると高山の山麓のアルギッパイオイ人（Argippaioi）が居住する土地になる。ヘロドトスはこの高峻な山地は北に向って横斷し得ない（25）と記している。即ち彼は、この山地を東西に走るものと看做しているが、アゾフ海から北東の方向に當るところからみて、ウラル山地であると推定される。[18]

アルギッパイオイ人に就ては、ヘロドトスには次のような興味ある記事がみられる。即ち彼等はスキティア風の衣服を着するが、固有の言語を有し、その容貌は扁平な鼻と大きな顎を持ち、しかも男女ともに生れながら禿頭である。また彼等の生活は、冬は樹木に氈（フェルト）をかけて住居とし、良好な牧地を得られないため家畜は比較的少く、從って彼等の主食はイチ



ジクほどの大さの木からとれる豆實大の果實であり、この果實からしぼり取つたアスキュ（aschy）と呼ばれる果汁にミルクを混じて飲み、渣滓からは一種の菓子を作つて食用とすると云うのである（123）。

以上の記述のうち、扁平な鼻と大きな顎と云う人種的な特徴からして、彼等は少くともアーリヤ系ではなく、モンゴール或はタタール系の遊牧民族であつたと思われ、冬は樹木に氈をかけて住居とすることも、キルギスや蒙古の遊牧民の包（パオ）を意味するものであろう。果汁が飲用される植物に就いては、今日でも南ウラル地方のバシュキル人の間では、エゾウワバミサクラ（*Prunus padus L.*）の一種の果汁を飲用に用いて居り[119]、タタール語の「酸い」を意味する *atchi, atchui*、或はトルコ語の「酸い」「辛い」を意味する *aşy* は、前記のアスキュと同義語であると云われている[120]。また彼等が禿頭であると云う點は、烏桓や鮮卑のように頭を圓く剃つていたこと[121]が誤つて傳えられたのであろう。

アルギッパイオイ人の東にはイッセドネス人（Issedones）が居住するが、イッセドネス人に就いては、ウラル地方への交通路と關連して、後に再び觸れることとして、ここではヘロドトスによつて示された、アルギッパイオイ人やイッセドネス人よりもさらに奥地の住民に就いて言及してみよう。しかし此等の奥地の住民は、ヘロドトス自身も、「何人も正確な知識を以つて語ることは出來ない」し、また「信憑し難い」（124）ことであると看做しているように、單にアルギッパイオ

イ人やイッセドネス人を通じて傳聞されたことを記載しているに過ぎない。

即ち先ずアルギッパイオイ人の語るところによれば、彼等の土地の背後に聳える高山は高峻で、通過し難いのであるが、この山地中には山羊の脚をした人間が住み、さらにその奥地には、六ケ月間眠り續ける人間がいると云う(33)。山羊脚の人間とは、おそらく山間に居住する山羊皮をまとつた未開の狩獸民を意味するものであり、六ケ月間眠る人間というのも、高緯度地方では、半年間の冬の長夜は屋外の活動が不可能なため、屋内に蟄居する原住民の生活を指したものと思われる(34)。

またイッセドネス人を通じての傳承によれば、イッセドネス人の奥地にはアリマスポイ(Arimaspoi)と呼ばれる隻眼の人間が居り、その背後には黄金を守るグリュプス(Grypus)(13, 27)、さらにその奥地にはヒュペルボレオイ人(Hyperboreoi)が北の海――ヘロドトスはその存在を信じていないが――のところまで住んでいると云うのである(13, 32—36)。アリマスポイのような隻眼人は、ホメロスにもキュクロペスと呼ばれる隻眼人がみられるように(35)、古代から中世にかけては、世界の僻遠の地方には、このような奇怪な姿をした人間が棲息するものと一般によく想像された。グリュプス、即ちグリフィンも、ギリシア人に古くから信じられた、軀幹は獅子、頭部と翼とが鷲であつて、黄金を守ると云う傳説的な怪獸であり、金の産出と關連する傳説と考えられるが、その形態からみても、グリュプスそのものの起源は北方ではなく、オリエント系統のものと思われ(36)、クテシアスはヘロドトスと異つて、インドの産金地帶である北部の山地に棲息すると述べている(37)。

またヒュペルボレオイ人の存在はヘロドトス自身は認め難いとなしているが(36)、彼等は世界をとりまく大洋のほとりの極北の地に居住し、「北風の背後」にあるため、常春の豐饒な環境に惠れて長命を享受し得る幸福な住民であると考えられ、ギリシア人に古くから傳つた理想鄕傳説の一つである(38)。それ故に、ヘロドトスがイッセドネス人の物語るところとして述べている此等の住民の傳承は、むしろギリシア人によつて、産金地をなす僻遠の地方の住民の姿を想像して、創り

出されたものであろう。

要するに以上のアルギッパイオイ人やイッセドネス人から奥地の傳說的な住民は別として、ヘロドトスがアルギッパイオイ人のところに至るまでには、七人の通譯と七種の言語を通じて取引が行われる(124)と述べているように、黑海北岸のスキティア地方からの交易路が通じ、スキティア人やギリシア人の交通が古くから行われていたことを示している。

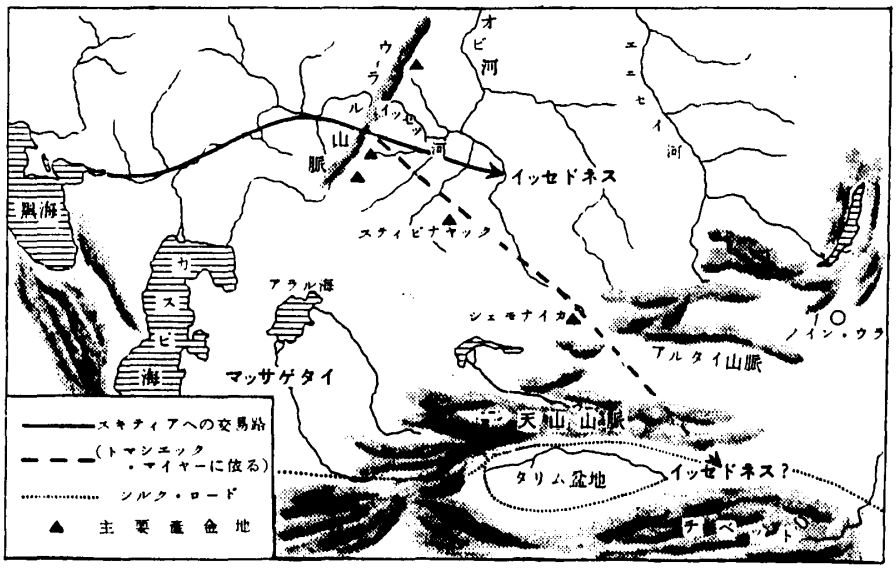
またアルギッパイオイ人の東に居住するイッセドネス人に就いては、ヘロドトスはプロコネンソスのアリステアスと呼ばれる詩人がイッセドネス人のもとを訪れた物語を記載している。アリステアスがどのような、また何時の時代の人であつたかは別問題としても、ヘカタイオスにもイッセドネスの名がみられるところからして、すでにイッセドネス人の土地までは以前からギリシア人の往來があり、從つてヘロドトスも述べているように、アルギッパイオイ人やイッセドネス人のところまでは、兎も角も「確實に知られていた」(125)のである。

そこで問題はイッセドネス人の居住地を何處に比定し得るかである。ヘロドトスはイッセドネス人の居住地は、前記の如くアルギッパイオイ人の東に當るばかりでなく、カスピ海の東に居住するマッサゲタイ人と「對い合つた」位置(I.201)にあると述べている。然るにプトレマイオスの地理書では、「イマオン(イマウス)山脈の彼方のスキティア」Σκυθία ἡ ἐκτὸς Ἰμαοῦ ὄρους (Scythia extra Imaum montem)のところに Issedones の名がみえ、Issedon Skythike (150°E, 20°N) 及び Issedon Serike (162°E, 45°N) の二都市が存在する。

またヘロドトスはイッセドネス人の間では、父が亡くなれば、生贄に捧げた羊の肉に父の屍體の肉を交えて、これを縁故者に饗應する風習があり(126)、マッサゲタイ人の場合にも、老齡に達した者は殺されて、家畜の肉と共に煮られて來客に饗される(I.216)と述べているが、このような風習は古代ではアジアの遊牧民族の間には相當廣く行われたとみえ、ストラボンも記載しているのみならず、さらに十三世紀に蒙古を訪れたルブルクも亦、チベットでは昔は親の肉を食する慣

習のあつたことを記している。[83] このような點からみて、トマシエックはアルギッパイオイ人の背後に聳える高山を以つてウラル山脈ではなくアルタイ山脈であるとし、從つてアルギッパイオイ人はアルタイ山脈南麓、イッセドネス人はタリム盆地がその居住地であると看做しており、さらにアリマスポイはチベットのブラマプトラ河上流の產金地帶に住む匈奴系の民族であり、またヒュペルボレオイ人は古代の中國を指したものであると推定している。[84] このようにイッセドネス人の居住地をスキティア地方から遠隔のタリム盆地附近に求めようとする見解は、リヒトホーフェン・ミンスなど多くの人々によつて認められるところであり、[85] マイヤーも古代の商業交通路が黑海沿岸からウラルを經て、アルタイからタリム盆地まで通じていたとなしている。[86]

しかし以上の見解にはなお多くの疑問が殘されている。卽ち若しトマシエックの推定したように、アリマスポイの傳承がチベットの產金地帶との關連を示すものであると解すれば、何故ヘロドトスはインドに關する記事のところにおいて、インド北部の山地の金を掘り出す蟻の物語（Ⅲ.105, 106）を別に記載しているのであろうか。またチベットが產金地帶であり、そこから金が西方の世界に多く輸出されたとすれば、その輸送路は當然インドを通ずるか、或は西方のバクトリアの方向に向うはずである。さらに、イッセドネス人の居住地がタリム盆地に當るとすれば、イッセドネス人のもとに至る交易路は、マイヤーなどが推定しているところの黑海北岸からウラル山地、アルタイ山地を經てタリム盆地に及ぶような、遠距離の迂回した通路を態々選ぶことはなく、後のシルク・ロードとほぼ同一の通路をとつたに違いない。のみならず、イッセドネス人の居住地をタリム盆地と看做す見解は、何れもプトレマイオスに示されたイッセドネスの位置を最も根據あるものとして、それに基づいているからである。しかしプトレマイオスの地理書のこれらの部分は、テュロス（Tyros）のマリノス（Marinos）によつたものであり、またマリノスのアジアの東方に關する知識は、絹貿易のために東方に派遣した部下の報告に基づくマケドニアの商人マエス　ティティアヌス（Maēs Titianus）の案內記（イティネラリア）に從つたものである。[87] その結果マリ



ノスは從來知られていたオイクメネよりもアジアが東方に著しくひろく擴つていると看做して、イマオン山脈とセリケ（セリカ）との間に、廣大な「イマオン山脈の彼方のスキティア」なる土地を想定して、ヘルマンが指摘しているように、ここにイッセドネスを位置せしめたと解すべきであろう。[117] それは或は、シルク・ロードによる東西交通の發達に伴い、ロブ・ノールにおける鄯善國において、紀元前七七年以降、漢の屯田によつて開發され、（七）屯域とも呼ばれた伊循（修）（I-sun）の名がローマ時代に傳わり、[118] マリノスがこれをイッセドネスと誤つたとも考えられ、何れにしても、イッセドネス人がタリム盆地に居住していたとすれば、イッセドネス人に關する何等かの資料が、中國の文獻にも當然見出される筈である。

それ故にヘロドトスのイッセドネス人の居住地は、以上のようにプトレマイオスによつてタリム盆地であると看做すよりは、アルギッパイオイ人の東に隣り、且つカスピ海の東に居住するマッサゲタイ人と「對い合つた」對稱的な位置に當ると云うヘロドトスの記載にむしろそのまま從つて、ウラル山脈の東麓からアルタイ山脈北麓に及ぶ西シベリアにかけての地域が比定さるべきであろう。これに對してウラル山脈から東流するオビ河の支流のイッセット（Isset）河の名稱も、或はイッセドネスと關連を有するかと考えられるのである。また產金地としても、東歐から內陸アジア一帶にかけて、現在、金の產出が豐富なのは、東シベリアのレナ河流域に次いでは南ウラル山地及びアルタイ山脈北麓のセモナルカ附近である。[119] しかもこの西シベリア地方が古くからスキティア地方との間に密接な關係が存在したことは、紀元一世紀前後には、

ペルム・トボルスクを中心にして、スキティアと類縁的な鐵器文化[70]が發達したことによつて知られる。のみならず、さらに北蒙古のウルガの北方に當るノイン・ウラ[71]における紀元前一世紀ごろの古墳から發掘された出土品によつても、スキティア地方からウラルを經てシベリアに及ぶ交通路が、既に古くから存在していたことが知られる。[72]

要するに以上にみられるように、ヘロドトスの地理的知識がヨーロッパでは、アルプス山脈から以北には殆ど及ばなかつたのに對して、黑海北岸のスキティア地方から北東の方向にかけては、はるかに遠隔の地方にまで達していることは、彼自身が認めているように、此等の地方に交易のために赴くスキティア人やギリシア人の商人が多く(12ff)、從つてヘロドトスがオルビアにおいて、彼等を通じて豐富な知識を獲ることが出來たからである。

またその交易の對象となつたものは、ヘロドトスが「ヨーロッパの北部には、明かに金が最も豐富に存在する。それが如何にして得られるか、これを私は的確に云えないが、隻眼族のアリマスポイやグリュプスから掠奪して來ると云われている」(Ⅲ116)と述べているように、ウラル山地からアルタイ山地北麓にかけて――今日でも、世界の重要な產金地域の一つである――產出する金であつた。殊に古代のように交通の未發達な時代では、金の如く極めて高價で重量を要しないものは、遠隔の地方からの輸送に最も適した交易品であつた。從つてアルギッパイオイ人やイッセドネス人がウラル山地からキルギス地方や西シベリア一帶にかけての遊牧民族であるとすれば、スキティアからの金の交易ルートは、ウラル山地から、さらに西シベリアやアルタイ山地北麓地方の產金地帶にまで達していたことが想定される。

何れにしても、當時のスキティア地方が、此等の地方から產出する金の集散地であつたことは、現に南ロシア地方のスキティアの古墳から、金製品が夥しく出土している事實によつても裏づけられよう。また金が黑海北岸のギリシア植民地からの最も重要な輸出品であつたことは、アゾフ海の出口を扼するパンティカパイオンの貨幣は最も優秀であり、且つ背面の刻印には、パンティカパイオンの富の源泉である穀物の穗や魚を踏みつけているグリュプスが表現されているものが

みられることによつてもうかがわれるのである。[79]

註

(1) 拙稿「ヘロドトスの地理」内田寛一教授還暦記念論文集　上。

(2) M. Rostovtzeff, Iranians and Greeks in South Russia, 1922, p. 44. 坪井・樋本譯「古代の南ロシア」六五頁。

(3) A. v. Humboldt, Kosmos, II. 123.

(4) J. B. Bury, A History of Greece to the Death of Alexander the Great, 2nd ed., 1913, pp. 87. 村田泰志譯「ギリシア史」上　一〇八頁以下。

(5) G. Sarton, A History of Science, 1952, ch. 7. pp. 160—198.

(6) M. Ninck, Die Entdeckung von Europa durch Griechen, 1945, s. 84.

(7) A. G. Dunaham, The History of Miletus, 1915.

(8) H. F. Tozer, History of Ancient Geography, 2nd ed. Cambridge 1935, pp. 48—49.

オルビアは最初はドニエプル河とブク河の合流する河口のベレザン島（現在は陸繋して半島）に位置していたが。後に廣い土地を求めてブク河西岸に移つた。ブク河及び特にドニエプル河はスキティアの奥地への好適な水路をなし、オルビアは黒海北岸のギリシア植民市の中心として發展した。(M. Cary, The Geographic Background of Greek and Roman History, Oxford 1949. p. 310.)

(9) E. H. Minns, Scythians and Greeks, Cambdrige 1913. pp. 436—444.

(10) W. W. How and W. Wells, A Commentary on Herodotus, Oxford 1912, I. pp. 18—20.

ヘロドトスはスキティアでは、オルビアからヒュパニス河を遡つてエクサンパイオス (Exampaios) と呼ばれるところ (81)、或はスキティア王族の墳墓の地 (71) を訪れたことを記している。

(11) ヘロドトスの第四卷を内容に從つて分類すれば、大體次のような主題に區分されるであろう。

一—四　ダレイオスのスキティア遠征の原因
五—一五　スキティア人の起源に關する傳承
一六—二〇　スキティアの諸部族＊
二一—二七　スキティアより北東にかけての諸部族＊
二八—三一　スキティアの氣候＊
三二—三六　ヒュペルボレオイとその傳承
三七—四五　世界の周邊の民族と大陸の區分及び大陸周航の航海＊
四七—五八　スキティアの土地と河川＊
五九—八〇　スキティア人の風習
八一—八二　スキティアの人口
八三—九八　ダレイオスのスキティア遠征と黒海の大さ
九九—一〇一　スキティアの形態＊
一〇二—一一七　スキティア周邊の諸部族＊
一一八—一四四　ペルシャ軍のスキティア進軍と後退

＊は特に地理學に關係のある項目

(12) ギリシア・ローマ時代には、スキティアとは西はカルパチア山脈から東はドン河流域、南は黒海沿岸から北はロシアの森林地帶の南緣、即ち現在のキエフからハルコフ付近までの地域全體を含む東ヨーロッパの平

原南部の繚繞であつた(Cary, p. 305.)。

(13) ヘロドトスはイステル河を起點とした彼が正方形を呈すると看做した土地を以つてスキテイア本土となしているが(99)、しかし他の箇所では(48)、スキテイア領内を流れる河川として、ポラタ(Porata)・アラロス(Araros)・ナバリス(Naparis)・オルデソス(Ordessos)・ティアラントス(Tiarantos)の五河川を列擧している。ポラタ河が今日のプルト河に比定し得る以外は、他の河川は何に當るか不明であるが、何れもイステル河の支流となしていることからみて、今日のカルパチア地方までが含まれることになり、ヘロドトスのスキテイアの境域に對する概念には矛盾が認められる。

(14) ヘロドトス以後も、古代ではアゾフ海は實際よりも著しく大きく考えられ、プトレマイオスもマイオテイス湖は緯度六度、經度六度以上の大さを有するものと誤つている。

(15) J. L. Myres, An Atempt to reconstruct the Maps used by Herodotus, Geogr. Journal. 1886. pp. 606—31.

(16) B. H. Bunbury, A History of Ancient Geography, London 1883, I. p. 179, p. 207.

(17) プリニウスもアンタカイオイは背骨がないと看做している(Plinius IX. 45)。またストラボンはマエオテイス湖もその產地であり、冬季海面が氷結した時、氷に穴をあけて捕獲されると記し、イルカほどの大きな魚であるとなしている(Strabo, VII. iii. 18)。

(18) M. Friedrichsen, Das europäische Russland (Klutes Handbuch d. geographische Wissenschaft, Bd. Mitteleuropa u. Osteuropa) s. 386.

(19) Bunbury, pp. 213—214.

(20) Cary, pp. 309—310.

(21) Aristoteles, Meteorol. i. 13.

(22) W. Köppen, Grundriss der Klimakunde, Berlin 1931.

(23) Hippocrates, Peri aeron. 19 今裕譯「ヒポクラテス全集」三〇四頁。

(24) 黑海は夏には北風が吹くため、エーゲ海から黑海北岸への往航は概ね春に限られていた(Cary, p. 308)。

(25) Strabo, VII. 307.

(26) Theophrastos, Peri Phyton historiai 4. 5. 3.

(27) Rostovzeff, ch. 3.

(28) スキテイア地方及びその周邊には、キンメリア人やスキテイア人の侵入以前に、古くから二つの史前文明がみられた。その一つは、銅、その他の鑛產資源に富むコーカサス山脈北麓のクバン地方に發達したもの(Rostovzeff, Ch. 2)、いま一つは、ウクライナの小麥地帶に發達したトリポリエ(Tripolye)文化である(V. G. Childe, The Dawn of European Civilization, ch. 6)。

(29) Rostovzeff, p. 95 邦譯書 一三九頁。

(30) Hippocrates, *ibid.* スキテイア人の住居については、ケルチ出土の土製明器によつてその形態を知り得る(Minns, pp. 50—51.)。また住居は匈奴、その他の遊牧民族に普くみられたところである(江上波夫「ユウラシア古代北方文化」二九一—二六頁)。

(31) Bunbury. I. p. 181.

(32) ローマのルペルクルス祭の如き一種の祭禮(K. Müllenhoff, Deutsche Altertumskunde, III s. 17)、或はシャーマンに類するもの(W. Smith, Dictionary of Greek and Roman Geography, II p. 422)、或は狼つきの迷信

(J. G. Frazer, Pausanias, IV. 189) と種々の解釋が下されている。

(33) K. Neumann, Die Hellenen im Skythenlande, 1855, s. 212.

(34) アレーマンのアダム (Adam von Bremen 1076 死) の編纂した「ハンブルグ教會區史」(Historia Hammburgensis Ecclesiae, IV, s. 24) には、「その (スウェーデン) 東は、リペエ (Ripae) 山脈に接し、雪に深く覆われた廣大な荒地が續り、怪異な人間の群が、近づき難い奥地に住んでいる。アマゾンも居れば、狗人 (Cynocephali) や前額に一目しかないキュクロペ (Cyclope) も住んでいる。またソリヌスが雲脚人 (Ymantopedes) と呼んだ、一本足で跳び歩く者も居り、好んで人肉を食する」(F. Nansen, In Nothern Mists I. 189 の引用による) とあり、ソリヌスによることは明かである。またヒアフォード (Hereford) 地圖にも、東ヨーロッパのところに食人種が描れている。

(35) Ptolemaeus, III 5. ミュレンホーフもアンドロファゴイが周邊と特に異つた習俗がみられないことからしても、食人のことは作意の物語と看做している (Müllenhoff, ibid)。

(36) Hecataeus, fragm. 154.

(37) Smith, II. p. 318.

(38) 古代には森林地帶の南限は北緯五〇度付近にまで及んでいた (Cary, p. 309)。

(39) Tacitus, Germania, C. 4. 'caerulei oculi, rutilae comae'

(40) 例えば、前漢書西域傳顔古師註「烏孫……青眼赤須 (鬚) 狀類獼猴」。唐書回鶻傳「人皆長大赤髮智面綠瞳」。

(41) 拙稿「地中海・黑海沿岸における古代ギリシアの植民」(田中秀作教授古稀記念論文集)。

(42) Neumann, s. 91.

(43) Rostovtzeff, 113. 邦譯書二六五—六頁。

(44) Humboldt, Kosmos, I, s. 176.

(45) Tacitus, C, 44.

(46) Plinius, VI. 19. Mela, I. 116.

(47) Minns, p. 107.

(48) Bunbury, I. p. 197, note 3. ランボルトはこの山地をアルタイ山脈と看做している (Humboldt, Asie Central, I. pp. 389—407)。

(49) Bunbury, *Ibid.*

(50) Ninck., s. 127.

(51) 後漢書烏桓傳「父子男女相對臥藉旦髡頭穿鼻便」。後漢書鮮卑傳「其言語習俗烏桓同唯婚姻先髡頭」。

(52) Bunbury, *Ibid.*

(53) Odyss., I X. 105—107.

(54) How and Wells, I. p. 307.

(55) Ctesias, Indica, 12, 250.

(56) How and Wells, I. pp. 313—314.

(57) 「七人の通譯」が意味する七種族が何れを指すかは明かでないが、おそらくスキティアからの交通路にそうものとして、スキティア人・サウロマタイ人・ブディノイ人・ゲロノイ人・テュッサゲタイ人・イウルカイ人・アルギッパイオイ人に當るものと思われる。

(58) Pauly-Wissowa, Real-Encyclopaedie, II. 1. s. 876.

(59) Hecataeus, fr. 168.

(60) Ptolemaeus, VI. 15, 16.

(61) ストラボンはマサゲタイ人のほかに、テルビケス人、或はスキテイア系の民族のうちにも同様な風習の存することを述べている (Strabo, XI 513, 520, VII 298)。

(62) The Journey of W. of Rubruck to the eastern part of the world 1253—1255, transl. by W. Rockhill (Hakluyt Soc., 2. Ser., No. 4, p. 199) 116 妹尾韶夫譯「リュブルックの東遊記」一一九頁。

(63) W. Tomaschek, Kritik der ältesten Nachrichten über den Scythischen Norden (Sitz. Ber. der Wiener Akad-d. Wissenschaft, CXVI 1888) 715ff; derselbe. Real-Encyclop. II. 2. s. 826.

(64) Ferd. v. Richthofen, China, 1877, I s. 488. Minns, s. 111.

(65) Ed. Myer, Geschichte des Altertums, 1901 III ss. 106—7.

(66) Ptolemaeus, I. c. 11.

(67) A. Herrmann, Das Land der Seide und Tibet, 1938, ss. 124—6, derselbe Real-Encyclop. XI. ss. 2235—6.

(68) 漢書西域傳鄯善國條「國中有伊循城其地肥美願漢遣二將屯田積穀」唐書地理志「自蒲昌海南岸西經七屯城漢伊修地也」。大谷勝眞、鄯善國都考（市村博士古稀記念論文集）。

(69) Oxford Regional Economic Atlas (U. S. S. R.) 1956, 69.

(70) Minns, pp. 248—253.

(71) Reallexikon der Vorgeschicht VIII ss. 544—5.

(72) ebendort, IX, s. 318. XII, s. 71.

(73) Rostovtzeff, p. 80. Cary.